

二〇一五年五月一九日、日本学士院と本研究所の共催により、「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催した。今回の研究集会は通算一五回目である。ロシア・サントペテルブルク市から、昨年冬に海軍文書館から異動になったロシア国立歴史文書館セルゲイ・チュエルニヤフスキー館長、さらにロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員らを招聘して御報告をいただいた。当日は三つの報告があった。第一報告は、研究代表者（保谷）から「在外日本関係史料のデジタルアーカイヴズ化プロジェクトについて」と題し、実施中のプロジェクト研究の概要が報告された。第二報告（クリモフ上級研究員）は、幕末の竹内使節団のサンクトペテルブルグ訪問について、ロシア側が日本使節を図書館や軍港クロンシュタットへ案内する経過を詳細に紹介した。第三報告（チュエルニヤフスキー館長）は、国立海軍文書館が所蔵する日本・朝鮮関係史料の解説目録にもとづき、日露戦争期の海軍提督アレクセエフのフォンドを分析した。参加者は六〇名である。以下、後二者の報告をここにおさめる。

この研究集会の実施にあたっては、クリモフ上級研究員から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

（プロジェクト代表／保谷 徹）

## 一八六二年日本使節団のロシア訪問

### — 図書館と軍港クロンシュタット —

ワジム・クリモフ

ロシア政府は、日本使節団に最高の好印象を与えることを目指し、日本人たちが興味を持つであろう首都の名所を皆見せようとした。最初の訪問場所目録は、ロシア帝室宮内大臣【Министр императорского двора】<sup>(1)</sup>である。ヴラジーミル・フォードロヴィチ・アドレルベルグ伯爵（一七九〇—一八八四、大臣在職期間は一八五二年八月三〇日—一八七〇年四月一七日）が許可したものであり、以下の通りである。<sup>1)</sup>

「冬宮  
エルミターージュ  
造兵廠

造幣局

博物館 鉱山博物館、動物学博物館

工科大学【Технологический Институт】

寄木細工工房

ガラス工場と陶磁器工場

クラスノエ・セローの宿営【Латерь】

クロンシュタット

ペテルゴーフ

ツァールスコエ・セロー<sup>(2)</sup>【Царское Село】

「エルミタージユ」の行に対して、赤褐色の色鉛筆で「芸術アカ「デミール」」と追記がある。

表の終わりに、アドレルベルグ伯爵は、青インクの、彼に特徴的な、難解な筆跡で、「まだあるかも」【и что еще окажется】と付け加える。<sup>3)</sup>

この「まだあるかも」の結果、表は、著しく拡大した。引用すると次のようになる。

「視察のために日本使節団に供する場所一覧表

- 一、冬宮
- 二、エルミタージユ
- 三、科学アカデミー博物館
- 四、造幣局
- 五、公共図書館
- 六、旧ロイヒテンベルグ公の鑄鉄鑄造工場 【Чугунно-Литейный завод, бывший Герцога Лейхтенбергского】
- 七、鉦山大学博物館
- 八、陸軍病院、あるいは、マリインスカヤ病院 【Маринская больница】と医科外科学学校診療室 【Кабинет Медико-Хирургической Академии】
- 九、芸術アカデミー
- 一〇、造兵廠と機械工場（前記）
- 一一、工科大学
- 一二、クロンシュタットと機械工場（前記）
- 一三、ブルコヴォ天文台
- 一四、コルピンスキー工場（蒸気機械）
- 一五、ペテルゴーフ（研磨工場）

一六、ツァールスコエ・セロー

一七、クラスノエ・セロー（宿営をいくつか）

一八、ガツチナ

一九、植物園

二〇、工科学校 【Инженерная Академия】

二一、海軍幼年学校 【Морской Кадетский Корпус, 教育期間が七一

一年と長く（時代により違う）、卒業後、士官候補生（ гардемарин）として艦隊に乗り組み、一年の実習航海を経て、

少尉（ мичман）になる。その意味では海軍兵学校に近い】

二二、セストロレツキー兵器廠

二三、陸軍輜重通信隊大学 【Институт Корпуса Путьей Сообщения】

二四、プレオブラジェンスキー連隊第一中隊兵營<sup>4)</sup>

さまざまな理由により、この表に登場する対象すべてにはとても、使節団は訪問することが出来なかった。例えば、上記表二二番のセストロレツキー兵器廠は一時的に閉鎖されており、廠員たちは、自分たちの農場の雌牛のえさとして冬に向けて干草を準備していた。八月六日、セストロレツキー兵器廠から、日本使節団員の受入責任者である宮廷應接掛長 【Перемониймейстер ВЪСОУДАЙШЕГО Двора】 シェレメチェフ氏宛に発信番号第七九八五号を付された以下の文書が届いた。

「本日受領したセストロレツキー兵器廠発の報告に関連し、第七八四八号付本職の返答の補足として、謹んで閣下に、以下のことをお知らせ申し上げます。現在当該工場は、水路の補修、ならびに、廠員たちが自己の草地での干し草刈りのため休暇中であることにより、操業を行っておりません。兵器製造工程は今月七日から再開される予定ではありませんが、今夏は廠内で大規模修繕工事が大々的に行われるため、完全な操業

開始は今年八月二〇日以降となります<sup>(5)</sup>。

上記表一番工科大学は夏休み期間中で、学生たちの夏休み期間中は、授業もないため、大掛かりな修繕作業が行われていた。

サンクト・ペテルブルグ工科大学学長は、一八六二年八月二日付第一〇四七号文書で次のように伝えている。

「日本使節団員受人責任者・宮廷應接掛長殿

七月三二日付第六三五号文書に対し、閣下に、謹んで以下のことをお知らせ申し上げます。現在、工科大学およびその各作業部門は修繕改修工事が行われており、それが終了するのは早くても一〇月になる見通しであります。従いまして、まことに遺憾ではありますが、日本使節団を工科大学および各作業部門見学のため受け入れることは、まずもつておよそ不可能であります<sup>(6)</sup>。

というわけで、今回は日本使節団が訪れた二ヶ所、公共図書館とクロンシユタット海軍基地について考察を加えよう。

#### 帝国公共図書館訪問

日本人の図書館訪問の考察を行う前に、図書館創設の歴史とロシア社会と国家における意義に付き、いくつか述べなくてはならない。

ロシアでは昔から個人による書籍蒐集が存在している。この伝統は古代ロシアの時代から続いている。一八世紀の初め、科学アカデミーや芸術アカデミーその他の国家が管理する図書館が創設された。だが、これだけでは十分ではなかった。国家の発展とさまざまな階級に教養ある人々を創るために、皆に開かれた本の保管場所を造ることが必要であった。このようにして、同種のものとしてはロシアで最初の組織である今日のロシア国立図書館【Российская национальная библиотека = Russian National Library】が作られた。荘厳な開館式が執り行われたのは一八

一四年一月二（一四）日である。同館は現在世界最大級の図書館のひとつである。その創設起源はエカチェリーナ二世（一七二九—一七九六、在位一七六二—一七九六）にある。彼女の発案により、ヨーロッパの最良な図書館を手本にして創られた公共の国立図書館は、ロシア帝国の国力と啓蒙思想への忠誠を具現化すべきものであった。基本的な使命となったのはロシア語の書物と手稿すべての蒐集である。首都の中心での建物の建設と設備整備はほとんど二〇年を要し、皇帝アレクサンドル一世（一七七七—一八二五、在位一八〇一—一八二五年）治世下で、完成した。初代館長であるアレクセイ・ニコラエヴィチ・オレーニン（一七六三—一八四三）が作った最初の法的執務規定は、「公共の福祉のために」、「何人も分け隔てなく」を謳う。

一八一四年八月、A・N・オレーニンは、次のように書く。

「公共図書館開設の真の目的は、何人たりとも、すべての印刷された書物を、たとえそれが稀覯本であったところで、自宅に持ち帰ることだけはできないものの、無料で利用できるようにすることである」。

一八一〇年、ロシア国内の印刷所から出版された印刷物はすべて、二部を公共図書館に寄贈する義務の決議がなされた。オレーニンはこの理由を次のように記す。

「樹木が根のおかげで最初の植物の力を授かるのと同じ様に、この公共図書館の成長は法の上に基礎付けられ、確立され、その法の効力により、新刊書物が二部ずつ国中から当館に寄贈されることになるのである」。

日本使節がペテルブルグに到着する少し前、建築家ヴァシーリー・イヴァノヴィチ・ソボリシシコフ（一八〇八—一八七二）は、イヴァン・イヴァノヴィチ・ゴルノスタエフ（一八二二—一八七四）の協力の下、書物の昇降機械、参考室の書架、机、女性利用者用読書室（女性の便宜のため）、画家用室を備えた新閲覧室が建設された。それ以外に、いく

つもある閲覧室は空調装置が取り付けられ、一定の温度に保たれていた。一八六六年、図書館の、ネフスキー通りとサドーヴォエ通りの角に面した窓に時計が設置され、その時計はプルコヴォ天文台の天体時計と電線で繋がっており、そのことにより正確な時を刻むことが保証された。

雑誌「祖国雑記」【Отечественные записки】の一八五六年六月号に N・プースキー【Н. Пуский】の頭文字筆名の下に、評論家が図書館についての論文を載せた。

この評論家は、「このような施設の必要性は皆が感じていた」と書く。「民衆教育の問題において、図書館の意義が増大しつつある中、そのことに極めて多くの寄与を為したのは、入館者が図書館の宝庫を利用する際に可能な限りの利便性を供与するという図書館首脳部の配慮であり、これはこの種の施設にとり必須の条件である。

実際、帝国公共図書館長は、完全にこのことを理解しており、…この目的のために、…既に一八五二年『帝国公共図書館案内』を刊行し、この案内書の助けを借り、入館者はそれぞれ、あらかじめ、図書館の全体的性格と設備について知ることができ、すぐに、詳細かつ具体的に図書館全体を見て回り、図書館にある文字財産と知己になることに着手できる。これを目的に図書館首脳部は、本を閲覧する際の煩雑な手続きを避け、祝祭日も例外なく、一日中書物を利用することができるようにしたのである。後者の状況は著しく入館者を増やした。というのは、多くの者は、学校には行っておらず…したがって、自分の知識欲を満たすことができるのは、勤務やその他の仕事から自由な時間においてのみだからである。昨年の図書館入館者二八七五人のうち、八二人のみが教育を受けた階級である」。

同論文で指摘されていることは、正しい。「図書館は民衆啓蒙の強力な手段としての彼「政府、クリモフ注」の手中にある」。さらに、重要

な主張がある。「知識の普及の問題は、現在、鉄道建設や国家の物質的富の適切な配分といった諸問題と同様、極めて高い意味と重要性を持つ」<sup>(8)</sup>。論文の著者はロシアの地方都市全部に図書館を設置すべきであると主張し、次のように書く。

「読者というのは、読書によって得られた財産ともいってべき出資金で、国家の隅々まで、また社会の全階層の間にわたり、知識の光をいっそう均等にかつ急速に広めることを助けるであろう、株主のようなものである…そもそもにおいて、我が国の物質的、と同時に、精神的な富の双方を考察するならば、それらの配分があまりにも不均等であることを指摘せざるを得ない」。

論文の著者は、帝国全地方に図書館を建設する際、ペテルブルグの図書館を模範とすべきであると考えている<sup>(10)</sup>。

この時期、帝国の基幹図書館は、モデスト・アンドレイヴィチ・コルフ（一八〇〇—一八七六）の提言により、ロシア帝国帝室内省の管轄下におかれ、そのことは直ちに図書館の財政に有益な効果をもたらした。図書館の維持費ほとんど二倍に増加した。たとえば、書物、手稿、音楽作品、銅版画、その他の印刷物の購入金は、一八六二年だけでも、当時にとつては大変な金額である一八、〇〇〇ルーブルの出費であった。それ以外に、書物と手稿の極めて貴重な蒐集品の寄贈が行われた。このように、一八六二年春、日本使節団が到着する前に、「三八ヶ所の様々な所の人々により…、寄贈されたのは、一〇二巻の印刷された書物と冊子、四四部の手稿、七つの銅版画」<sup>(11)</sup>。

手稿の中には、東洋諸国に関する文書がいくつもあり、例えばその内容は「インドと直接交易を開くことを目的とする、ベリチカ隊長指揮下のヒバ・ブラハラ武装商人キャラバンの装備リスト。もつとも、インドとの直接交易は、当時の戦争状態のため実現はされなかった。…一七八〇

年のモンゴル語の書籍、中国の国境問題に携わるハルカンのトゥシェト・ハンの会議からイルクーツク知事宛、同書簡の内容は、一七人のロシア人越境者の情況記述で、交易を装い、中国国境内に入ったもので、彼らから賄賂を受け取った中国役人により非公式なかたちで解放された<sup>12)</sup>。

一八六二年七月二四日、皇帝の命令を奉じた元老院勅令により【Высочайшем указом Правительствующего Сената】、図書館は帝室宮内省の膝下から離れ、「民衆啓蒙省【Министерств Народного Просвещения】の管轄と管理下に」移された<sup>13)</sup>。一三年間、図書館は帝室宮内省の組織下にあった。この時期が「公共図書館の歴史における輝かしいかつ最良の一頁を構成していることは論を待たない」。その時期に図書館の長をしていたのはコルフ男爵であった。

皇帝アレクサンドル二世（一八一八—一八八一年、在位一八五五—一八八一）は自ら直接、すぐれた図書館員を激励しようとした。例えば、一八六三年上級図書館員ソボリシニコフを「新聞閲覧室開設の労による褒賞」により六等官に昇格させ、上級図書館員ミンツロフ、同じく上級図書館員ヴァリテルに学術調査書を書いた功により、皇帝の謝意が宣せられ、下級図書館員ボンネリに対しては、学術著作によりダイヤモンドの指輪が下賜され、製本匠アガツには長年にわたる熱心な働きに対し「聖スタニスラフ勲章授付金メダルを授与される栄光に浴した<sup>14)</sup>」。ロシア帝国皇帝により図書館職員たちに表された皇帝の褒賞と陛下の思し召しは、さらにいつそう、図書館職員たちの精励を促した。

ここで明言してよいのは、帝国公共図書館は国民の国家的共有財産であり、国民の誇りとなったということである。一八五六年の図書館年次報告の中で次のように述べられている。

「図書館は、ある意味、すべての真摯な知的営みの中心となった。かつ当館所蔵の書籍類なしには、我が国での大々的な学問的著述の完成は

ほぼ不可能である。このように当館は、国家施設としての意義を得、国民的栄光の記念碑という従来の性格に加え、知的発展事業の生ける記念碑という、新たな性格を併せ持つこととなった<sup>16)</sup>。

日本使節団の訪問先推奨リストに公共図書館が含まれたのは、まさにこの理由による。一九世紀六〇年代にかけて、政府、そしてアレクサンドル二世も個人的に、「蒐集した非物質的財宝を一般に開放し、我が国の教養ある公衆の大多数に広め、そのことにより国民教養全体の拡大を目指した<sup>17)</sup>」。

帝国公共図書館は更に、ロシアで入手できる日本関係の印刷資料を積極的に蒐集した。たとえば「箱館の我が国領事館に勤務するI・V・マホフは、『ロシア人官吏から日本人の子供たちへの贈り物 ロシア文字』と題した、日本人のためのロシア文字集を押し型した木板」を寄贈した。この貴重な興味深い出版物は一部、すでにそれ以前にマホフ氏により図書館に寄贈されていた<sup>18)</sup>。【同書は表紙題箋に「ろしやのいろは ルスカヤアズブカ Русская Азбука ロシヤノイロハ」と書かれており、現在日本では、通常「ろしやのいろは 日本の子供たちのためのロシア語読本」と呼びならわされている】

一八六三年、図書館には「日本から輸送され、民衆啓蒙大臣殿【Министр народного просвещения】の命により、図書館に移送された」二七三冊の日本語の本が配架された。これらの書物は以下の通りである。【日本史一五冊、日本古代史二〇冊、最新日本史一〇冊、武将一二二人列伝【История двенадцати военачальников】一四冊、源平合戦物語

【Рассказы о военных действиях между домами Минamoto и Тайра】二五冊、二十一王朝史【二十一史か】五六冊、平治物語【と思われる。История мирного времени 「平和時代史」場合によっては平安時代史。】二巻四五冊、源氏物語【と思われる。Рассказы о доме Минamoto】六〇冊、官

庁職員録、年代記、江戸名所、日本地図二冊、日本・五ヶ国条約五冊<sup>(19)</sup>。

ロシアでは、毎年、ペテルブルグやモスクワといった二首都ばかりではなく、地方都市でも、一般に公開された図書館の数が増えていった。一八六〇年六月二〇日、ヤロスラーヴリで、公共図書館が開設された。その基金には「当地の貴族会のメンバーにより銀二、〇〇〇ルーブリが寄付された<sup>(20)</sup>」。

公共図書館訪問について、歴史家・宮永孝は、福澤諭吉の日記である『西航記』、『福澤諭吉の西航巡歴』という研究【山口一夫著、福澤諭吉協会叢書一九八〇年】から引用し、簡単ではあるが言及している<sup>(21)</sup>。

【一八六二年】八月二十四日金曜日、日本使節団を応接したS・シエレメチエフ伯は、帝室宮内省儀典局長【секретарь экспедиции министерства императорского двора】であるプラトン・イヴァノヴィチ・ゴルブツォフに通知した。「明日土曜日二時、使節団の一角が公共図書館…を視察することになる<sup>(22)</sup>」。この指示書に基づいて公共図書館に次のような内容の通知が送られた。

「帝国公共図書館担当官吏殿

本日八月二五日、午後二時、日本使節団員が図書館訪問を希望している。本件に付、貴殿に【Ваше М.П.】謹んで急ぎお知らせ申し上げます。必要と思われる関係者にこのことをお伝え頂くようお願い申し上げます。

儀典局長 【секретарь Экспедиции】署名、ゴルブツォフ」

一八六二年八月二五日<sup>(23)</sup>」。

ロシア国立図書館古文書部には、送られた文書が保存されている。その文書は、上記引用した文章と本質的には完全に一致しており、若干の細かい違いが見られるのみである。例えば、帝室宮内省に残されている文書では「貴殿」の部分で略表記【M.P.】のみで書かれているのに対

して、ロシア国立図書館古文書部にあるそれには「貴殿」【Милостивый Государь】と略記ではない形<sup>(24)</sup>、ロシア国立歴史文書館のそれには「担当官吏殿」【Г. Дежурному чиновнику】、また、ロシア科学アカデミー古文書部のそれには「官吏殿」【Господину Чиновнику】とある。言い換えれば、図書館に送付された文書では、相手方への呼び掛けに際して略表記ではなく、より丁寧な言い方が用いられている。図書館長のイヴァン・ダヴィドヴィチ・デリャノフ（一八一八—一八九八、在任期間一八六一—一八八二）は、「本件をソポリシシコフ、ヴァシーリイ・イヴァノヴィチに伝えること」、また他の館員に日本使節団の近々の訪問および賓客の然るべき応接について伝えることとの決裁を下した<sup>(25)</sup>。表書き、宛名は、鉛筆で記されているため判読困難である。この文書は、一八六四年度の文書がまとめられているファイルの中にあつたために、探し出すのが容易ではなかった。

公共図書館からは早急に回答が寄せられた。

「儀典局からの、帝国公共図書館担当官吏宛での文書を拝受致しました。賓客方は、アレクサンドリンスカヤ広場「赤鉛筆で下線、クリモフ」から正面玄関に来訪することが可能であります。

上級図書館員V・S・…【姓部分の】署名判読不能、クリモフ」

一八六二年八月二五日<sup>(26)</sup>」。

一八六二年のこの時期（六月三日から十一月一日）は「街の」大火、および新閲覧室の内装が完了していないため「開館していなかったにも関わらず<sup>(27)</sup>」、図書館職員たちと図書館長は、賓客を迎え入れることができると判断した。使節団員たちが、手稿部、初版部、刊本書庫、複数の閲覧室という決められたルートに従って案内されたことはまず間違いな。この見学は通常二時半から三時までであった。これは、定期的に希

望者全員の一般見学を案内していたコソヴィチ、カエタン・アンドレエヴィチ（一八一四—一八八三）の通常報告書により確認できる。見学には、帝国の高位高官や将軍・提督から、農民までも参加していた。グループは二人から五〇人までで、集まった人数による。見学後は、図書館長であるモデスト・ペトロヴィチ【アンドレヴィチ】・コルフに報告書が書かれていた。<sup>(29)</sup>

残念ながら、日本使節団図書館見学の報告書は見つかっていない。当時館長の交代があり、おそらく、これが報告文書作成に影響を与えたのだろう。それ以外に、当時、図書館は修繕と増築のため閉鎖されていた。使節団の施設訪問に付き、上層部宛報告文書が作成されなかったとは考えにくい。そのような報告書がなかった可能性も排除しきれない。あるいは、ロシア国立図書館ではなく、他の文書館に報告書が保存されているのかもしれない。

和暦文久二年八月一四日、日本人たちはサンクト・ペテルブルグにある帝国公共図書館を訪れた。訪問者の正確な人数と彼らの名前は今のところ確定出来ない。福澤諭吉はその中の一人であった。それまでに彼は、イギリスおよびフランスの公共図書館を訪れている。パリは、彼らがロシアに向かう途中にある最初のヨーロッパの首都であった。フランスの首都にある公共図書館は福澤に大きな印象を与えた。福澤がヨーロッパ訪問までに学んだのはオランダ語と英語のみだったが、<sup>(30)</sup>その著書『西航記』の中では、「library」という英語ではなく「bibliothèques」というフランス語の言葉を使うようになった。中でも彼が特筆していることは、ロンドン図書館には八〇万冊、パリ図書館には一五〇万冊、そしてロシア帝国の首都にあるサンクト・ペテルブルグ図書館には九〇万冊が所蔵されていることである。彼は、パリ図書館の書棚を一行に並べると、七里、あるいは一七マイル、あるいは二七・四八九kmになるであ

ろうと書いている（二里は三・九二七km、クリモフ注<sup>(31)</sup>）。

『西航記』の中で福澤は、サンクト・ペテルブルグ図書館を訪問した際の様子を極めて簡潔に次のように記している。「八月一四日」蔵書庫に出掛けた。<sup>(32)</sup>書籍数は、刊本【福澤の表記は「板本」が九〇万部<sup>(33)</sup>、手稿【福澤の表記は「寫本」が四万部である。刊本のうちロシアで発行されたものだけでおよそ六〇万部ある。古印刷本【ИЗДАВАЮЩАЯ】福澤の表記は「古書」も所蔵されている。一四四〇年ドイツで刊行された聖書がある。これはヨーロッパで最も古い刊本であるとのことだった。<sup>(35)</sup>【福澤の表記は「古書あり、千四百四十年獨逸出版の經書なり。是歐羅巴最古の板本と云」<sup>(36)</sup>。夕刻にエラーギン【福澤の表記は「エラゲン」鳥に向かった<sup>(37)</sup>。彼の『西航手帳』の中から、その簡潔な記述にも関わらず、補足的な情報を得ることが出来る。

「八月一三日。図書館【福澤の表記は「書庫」】。刊本九〇万冊、手稿【福澤の表記は「写本」四万部。ロシア、モスクワで【福澤の表記は「モスコにて」、おそらく「モスクワにて」の意味】、初めて書籍が印刷されたのは一五六四年、その他に一四九一年「の書籍がある」、外国で印刷されたものである【福澤の表記は「板本を造る一五六四又一四九一此は外國にて／出版」】。一四四〇年、ドイツで印刷されたラテン語の書物は、ヨーロッパで最初の書籍である【福澤の表記は「一四四〇獨逸にて出版／ラテン語の書此を／欧州第一の板本／なり」と<sup>(41)</sup>】。

以上が、福澤諭吉が世界最大の一つを訪れた際の印象について『西航記』の中に書き残しているすべてであり、情報としては微々たるものである。ドイツの稀観書に付き記すことを必要と福澤がみなしたことは興味深い。ロシア語による最初の印刷書に関しては『西航手帳』の中で言及しているのみで、その一方でロシア語手稿については何一つ記されていない。単に福澤の興味を引かなかったということであろう。公刊され

た日記の文久二年八月一四日付の中では、第二使節松平石見守の随員で家臣である野沢伊久太（？―？）も、市川清流（一八二四―？）も図書館訪問については記していない。

日本の思想家は、理解を容易にするためにヨーロッパの一流の図書館を互いに比較している【福澤『西航記』閏八月三日に記述】。ロシア政府はヨーロッパの図書館を模範にして、それらに劣らない図書館を目指した。

一八六二年一月四日に新しい閲覧室が開かれた。他のヨーロッパ諸国の閲覧室と比較して館長のデリヤノフは、「我々の閲覧室はそれらを、大英博物館のロタンダを除いて、その規模、優雅さ、および閲覧者にとっての利便性という点で凌駕している」と明言している。閲覧室の建造は上級図書館員で建築家のV・I・ソボリシニコフの設計によるもので、彼は一流の図書館建築、特に閲覧室を実際に知るために特別にヨーロッパに出掛けた。

「ホールおよび閲覧室の机の上、受付台、さらに閲覧室の両側の片蓋柱に、円筒形の五〇個の灯りが毎日点いており、通常のガス燈火に比して三倍のガスを必要とする。更に、書棚、小階段、婦人室などにも普通の照明具が二〇個あるが、これらすべての照明の費用はそれぞれ一時間あたり七〇コペイカ以下で収まっている」<sup>(43)</sup>。

なお、日本の使節団たちは図書館のガス燈を十分に評定することが出来なかつた。彼らの訪問は図書館の開館前であつたので、暗い時間帯に鮮やかな光で照らされた閲覧室を見ることが出来なかつたからである。

日本人たちは、ロシア、ロシア社会にとり、帝国公共図書館が国内の他の公共図書館の模範となつていたという、その持つ意味のすべてを感じたことはなかつた。彼らは、サンクト・ペテルブルグ図書館を西欧で見たものと比べたのみで、同図書館の前史、ロシア社会におけるその

役割を十分には理解していなかつた。

ロマノフ家の代々の主である皇帝や女帝は、啓蒙の進展のため、全国に図書館を創るべく、金銭の寄付、手稿や刊本の貴重なコレクションの寄付など、可能な限りのことをし、身を以て貴族階級に範を示した。例えば、海軍士官たちは、海軍少尉K・N・マチュウシキンの発意で、読み書きの出来る水兵たちに配布するための本を私費で購入し、一八六〇年一月一日にはサンクト・ペテルブルグのクリュコフ兵舎の建物の中に、<sup>(44)</sup>最初の水兵図書館を創設した。<sup>(45)</sup>海軍庁【Морское ведомство】は彼らの発意を奨励し、折りにふれて財政援助をした。

一八六一年七月一日には同図書館所蔵の本は一五七冊にまでなつた。強調しなければならないのは、この図書館が実質的には海軍士官たちの資金で成り立つていたということである。帝国公共図書館長M・A・コルフは重複本七九点を水兵図書館に分与した。政府、皇帝アレクサンドル二世は一八六三年初め、海軍少尉K・N・マチュウシキンの「下級兵士への読み書き指導および図書館創設」の功に対し聖スタニスラフ三等勲章を授与した。<sup>(46)</sup>一八九四年初めには、同図書館が所蔵する本は四〇三九冊になつた。すべての階級の人々が利用できるこのような新しい公共図書館創設の波は全国に波及し、徐々にではあるが、かなりの速さで、多くの大衆の思考様式を変えていき、それによりアレクサンドル二世時の急速な経済発展の土壌を準備し、強化していった。そして、この動きの大元にいたがロマノフ家の代々の主であつたのである。

#### クロンシュタット訪問

まず最初に、この海軍要塞創設の歴史を簡単に見ておく必要がある。「クロンシュタット」という地名は、Krone（王冠）とStadt（都市）という二つのドイツ語の語から作られたものである。この要塞都市は、バ

ルト海フィンランド湾のコトリン島とその付近の小島に置かれている。

堰が建造された一九八三年以前は、クロンシュタットへは船で行くしか手段がなかった。一九九〇年、同要塞は、ペテルブルグの歴史的中核をなす構成部分として、ユネスコの世界遺産リストに登録された。要塞構築が始まったのはロシア帝国の新しい首都が建設されるとほぼ同時であった。最初の堡壘が作られたのは一七〇四年である。要塞は一七〇四年五月七（一八）日、当初は「クロンシロット」と名付けられた（オランダ語のKronslot「王冠の城」）。本来のクロンシロットは最初の要塞施設で、コトリン島の南側の浅瀬に作られた堡壘であった。ピョートル一世は一七二三年一〇月七日（一八日）に島への大規模な要塞構築に着手した。「……この要塞は、すべての都市機能と港湾施設を備え、全方面からの防衛に役立つものとなろう」。この時点でこの町は、現在親しまれている「クロンシュタット」という名称となった。

ピョートル一世に始まり歴代の皇帝は、その戦略的位置に鑑みクロンシュタットに特別な配慮を示してきた。海軍の要塞は帝国の首都を確実に守ってきた。

アレクサンドル二世はクロンシュタット投錨地、そしてクロンシュタット要塞そのものをもしばしば訪れた。【一八六二年】七月、皇帝は、クロンシュタットと極東から帰着したスヴェトラナ号を訪問した。皇帝が特に興味を示したのは、遠洋航海から艦長が持ち帰った珍しい品々、「日本と中国の思い出の品で、あらゆる装飾小物と小さな像がぎっしりと詰まった魅惑的な日本風の棚」であった。その他、皇帝と皇太子が魅せられたのは「亡き皇太后アレクサンドラ・フォードロヴナ【アレクサンドル二世の母、ニコライ一世の妻】の皇帝旗を掲げたフリゲート艦スヴェトラナ号の螺鈿絵付きの日本机であった。この螺鈿は、ニースで描かれた同艦の写生画を元に日本人が作ったものであった。彼らは驚く

ほど正確に模写し、素晴らしい机が出来たのである<sup>(47)</sup>。八月だけでもアレクサンドル二世は海軍基地を数回訪れた。八月二日、皇帝は、ヴィクトリア英国女王（一八一九—一九〇一、在位一八三七—一九〇一）の第二子【次男だがアルフレッドは第四子】であるアルフレッド王子（一八四四—一九〇〇）をクロンシュタットに案内したが、王子がペテルブルグにやって来たのは、日本使節団が訪れたのと同じ日であった。「皇帝は：港と投錨地をご訪問遊ばされた。皇帝は蒸気ヨット艦アレクサンドリア号で午後二時半にお着きになられた。王子には皇帝陛下がご同行なされた。アレクサンドリア号には皇帝旗が掲げられ、蒸気艦ストレリナ号が皇帝のヨット艦の後から続いた<sup>(49)</sup>」。アレクサンドル二世がアルフレッド王子を案内した場所が、後に日本使節団が訪れた場所と同じであったことには、興味深いものがある。それから数年後に、外国の客を案内するルートがおそらく出来上がったのであろう。

「クロンシュタットの町で皇帝が若い王子に見せて廻ったのは、フリゲート艦セヴァストーポリ号を建造中であつたドック工廠【Якорное амплачиство】ニコラエフスキー（湿ドック）【Якорный Док】浮きドックの可能性も（『欧行記』『遣外使節日記纂輯』第三卷三〇三頁）<sup>(48)</sup>」、蒸気船工場、海軍病院であつた。工場で皇帝は一時間以上滞在し、その素晴らしい建物のすべての場所を見て回つた。蒸気船工場から皇帝一行はオラニエンバウム埠頭に向かい、そこでは蒸気ヨット艦アレクサンドリア号が待機していた。その後皇帝は王子と共に小投錨地を見学、クペイチエスカヤ埠頭の門の傍を通り過ぎ、「メニシコフ公爵」堡壘と投錨地に行つた<sup>(50)</sup>。

一八六二年八月一日皇帝は皇太子と共に東クロンシュタット投錨地を訪れ、「最近、東大洋「太平洋、クリモフ」から戻つて来たクリツパー艦ストレローク号と、アルハンゲリスタから到着した蒸気フリゲート艦ソコムバラ号を訪問した<sup>(51)</sup>」。

クロンシュタットは軍艦の基地であっただけでなく、その港では商船の往来も活況を呈していた。一八六二年には「航行が開始されてから九月一七日までに、港には蒸気船二五九隻、帆船一五七八隻が来航し、蒸気船二二七隻、帆船一七〇隻が出航して行った」<sup>(32)</sup>。

日本使節団がクロンシュタットを初めて目にしたのは、海軍基地の投錨地にスメールイ号が到着した時で、八月一日付の首都の新聞『サンクト・ペテルブルグ報知』【“Санкт-Петербургские ведомости”】が伝えているところによれば、七月二十七日の「午後九時過ぎ…スヴィネムンデから」であった。同日午後二時、大砲八六門装備スクリュー艦St. George号に乗艦し、英国王子アルフレッドが、大砲一七門装備スクリュー艦Chanticleer号に護衛され、クロンシュタット港投錨地に到着した。晴天で、投錨地に停泊していたロシアの艦船は、英国女王陛下の誕生日を祝い、旗で満艦飾であった。クロンシュタット投錨地は「何時になく華やかな様相を呈していた」<sup>(33)</sup>。翌日の七月二十八日一二時、日本使節団は蒸気フリゲート艦スメールイ号から宮廷付きの蒸気船ストレリナ号に乗り替え、サンクト・ペテルブルグに向かった。一行の荷物は前もって二隻の蒸気船スラヴァンカ号とペテルブルグ号で運ばれた。

一ヶ月後、日本使節団の代表者たちには、クリミア戦争時、英国艦隊の攻撃からロシアの首都の安全を守った海軍基地クロンシュタットをいっそう詳細に知る機会が与えられた。使節団によるペテルブルグ、特にクロンシュタット訪問については、日本の歴史研究者たちによる論考が既にあるが、ロシアへの最初の日本使節団というテーマに早い時期に取り組んだ一人に保田孝一がいる<sup>(34)</sup>。鈴木健夫は、一八六二年九月四日付の『サンクト・ペテルブルグ報知』第二二二二号【第一九二二号】の記事（海軍士官たちの手になる現地の新聞『クロンシュタット通報』の報道を転載した）に基づき、コトリン島への日本人たちの訪問について考察して

<sup>(35)</sup>いる。この論文では、日本の歴史研究者にすでに知られている新聞報道がすべて、省略されずに引用されていると同時に、他の文書および新聞資料も取り込んである。

使節団の後見人で、全行事と会見を組織したシユレメチェフ伯爵は、八月二十九日、ロシア帝国外務省アジア局のからほど遠くないイギリス海岸通りの船着き場で、午前一〇時、蒸気船イリメニ号が「日本使節団の士官たち」をコトリン島に送る手はずになっていると通知している。P・P・ゴルフツォフが使節団の出発の設定をした。

#### 重要【Hykное 下線は原文】

プラトン・プラトノヴィチ殿 【Милостивый Государи!】

海軍省長官殿の許可を得、日本使節団の士官たちをクロンシュタットに送り届けるため、明朝一〇時、イギリス海岸通りに蒸気船イリメニ号を準備すると共に、使節団の同行者として、海軍省長官付のヴェレシシャーギン海軍少佐を任命することを謹んでお知らせ申し上げます。

貴殿への心からの尊敬と忠節の念を込めて

第一一七五号

一八六二年八月二十八日

P・P・ゴルフツォフ殿へ

貴殿の従順なる僕より

「シユレメチェフの書名」<sup>(36)</sup>

八月二十九日（文久二年八月一五日）水曜日、正午に、使節団のうち一九名が蒸気船イリメニ号でペテルブルグからクロンシュタットに到着し

た。第一使節タケウチ・シモダ・ノ・カミ【Takeuti Simoda-no kami】<sup>(57)</sup>

と通訳のフクジ・ジェン・イツイロ【Фукудзи Жень-Ициро】<sup>(58)</sup>は、「ペテルブルグとその近郊の見学が休むことなく続いたことからの疲労のため」、<sup>(59)</sup>『サンクト・ペテルブルグ報知』【Санктпетербургские ведомости】の通信員たちの提案によりペテルブルグに残った。【クロンシュタットに向かった一九人のうち】名前が判っているのは三人である。福澤諭吉、益頭駿次郎（一八二〇/二九？—一九〇〇）、淵辺徳蔵（？—？）<sup>(60)</sup>。使節団に同行したのは、海軍省からヴェレシシャーギン海軍少佐、外務省からはロマンとヴォリフの二氏である。クロンシュタット側で使節団を迎え案内したのは、クロンシュタット港湾軍令部副官【адъютант штаба Кронштагского порта】モジャイスキー海軍少佐、彼は日本人たちがドイツのスヴィネムンデからクロンシュタットへ蒸気フリゲート艦スメリイ号で移動した際の同行者で、日本人たちによく知られていた。福澤諭吉は、スヴィネムンデからクロンシュタットへ海上移動した時にスメリイ号上でロシアの海軍士官と知己を得たが、『西航手帳』の中で彼の名前をローマ字で「Adjutant Capitaine Lieutenant Basile Majiskij」と記している（七月七日付<sup>(61)</sup>）。名前の部分では、「v」音を「b」と書く日本人によくある間違いが見られ、「Vasilij」ではなく「Basilij」となっている。クロンシュタット港湾軍令部先任副官【старший адъютант штаба Кронштагского порта】ヴァシーリー・ヴァシリエヴィチ・モジャイスキーは、プチャーチンと共に日本に行ったアレクサンドル・フォードロヴィチ・モジャイスキーの従兄弟で、<sup>(62)</sup>クロンシュタットで日本の客を案内することとなったのである。

日本人たちはスプリング付四輪幌付馬車と無蓋馬車で島内を移動した。彼らは蒸気船工場に案内された。彼らが訪問した時は工場内で仕事は行われていなかった。

「祝日に当たっていたからであるが、各作業所はすべて錠が開けられており、日本人たちは格段の注意をもって巨大な機械や様々な作業台を見て回った。その後、彼らは兵器庫と雛型室に案内されたが、そこで彼らは特に注意を引いたものすべてについて書き留め、図を描いていた。そこを出た後、彼らは小型船艇でペトロフスキー埠頭からメニシコフ堡壘に向かい、そこで蒸気船イリメニ号に乗り換えて、軍艦皇帝ニコライ一世号【艦種は装甲戦艦(Броненосец)】を見学するために大投錨地に向かった。日本人たちは、きわめて具合のよくない衣服のまま一〇〇門装備の軍艦のタラップの昇り降り之余儀なくされたが、そのような衣服でよくもうろたえなかったものだと驚くばかりである。艦のすべての甲板を周り、艦の壮大さに驚いた彼らは、同じルートでペトロフスキー埠頭に戻り、そこからゴスポドスカヤ通りを経て、海軍クラブ【морское общество】と図書館に行った。クラブで日本人の目を奪ったのは華麗な舞踏ホールであった。図書館で彼らは日本語書籍が所蔵されているのを目にし、故国から運ばれたその豊富なコレクションを見た時、彼らの浅黒い顔が輝いたのであろうさまは特筆に値する。

海軍クラブの後、日本人たちはドック工廠を見学し、そこから、「夏の園」にあるクラブの「夏の館」での朝食に出掛けた。四時間に及ぶ休みのない行動の後だけに彼らは喜んで食卓につき、旺盛な食欲で食べかつ飲んだ。彼らが特に気に入ったのはシャンパンで、他の酒類よりも好んだ。

夕刻六時に日本人たちは、好奇の群衆に見送られ、蒸気船イリメニ号でペテルブルグに戻った<sup>(63)</sup>。

九月一日付の『クロンシュタット通報』【Кронштагский вестник】は、日本使節団のクロンシュタット訪問を再び取り上げて、次のように記している。「彼らは我々の町や投錨地が誇れるものすべてを見学した。

蒸気船工場、兵器庫、堡壘のうちの一つ、軍艦皇帝ニコライ一世号、海軍クラブと図書館、そしてその行程の締めくくりとして、公共庭園【Общественный сад】の中で、この夏に出来上がった館、あるいは「夏のクラブ」の東屋で朝食をとった。庭園には好奇心を持った人たちが沢山集まった。日本人たちは「夏の園」を散歩したが、平日としては、我が国ではよく知られているように、極めて稀なことであった。朝食の席には酒がふんだんに用意され、シャンペンの瓶の栓がひっきりなしに開けられた。そして日本人たちは極めて上機嫌でクロンシュタットを後にした。彼らは子供や若い女性が好きで、子供たちに手を差し伸べて可愛がり、また若い女性には何か言葉を掛け、優しい目を向けていたのを我々はこの目で見た。日本人の一人が、大きな並木道を通った時に、ベンチに腰掛けていたご婦人方に向かって実にはつきりと「bon jour, madame! Comment vous portez-vous?»【「こんにちは、皆さん、いかがお過ごしですか」と言ったのが聞こえた。また別の一人は、一人の若い婦人に目を遣りながら、「エピヨカ・ムスメ」（「なんと素敵なお嬢さんなことか」の意味）と数回繰り返したのを耳にした。この言葉は我々をして、女性に対する日本人の好みはヨーロッパ人のそれと何ら変わらないことを結論づけさせた。「エピヨカ」と言われた女性は事実非常に魅力的な容貌の持ち主であった<sup>(64)</sup>。

日本使節団はクロンシュタット投錨地を見学した。事情に通じていない者には理解出来なかったはずだが、一八五九年以来の各港湾の大規模な海底削深工事が完遂されていた。この工事が行われた目的は、「越冬に向け、最大級の艦船を…安全に停泊させる可能性」を得るため<sup>(65)</sup>で、「掘り出された底土は、一八五九年に六・八六三立方サージュン、一八六〇年に二〇・〇一二立方サージュン、（総計）二六・八七五立方サージュンであった<sup>(66)</sup>」。

日本人たちも自分の日記の中で短い記述を残している。市川清流（渡の名でも知られており、第二使節である松平石見守の随員（≡家来）は、八月一七日（グリゴリオ暦九月一〇日）付で、残念ながらクロンシュタット行きが叶わなかったと記している。それでも彼は人伝えに聞いたこととして、使節団は、「製作所」（おそらく、蒸気船工場のことであろう、クリモフ）、兵器庫、造船ドック（造船場）の見学に出掛けた、と書いている。彼らはドックや工場の規模に目を見張った。投錨地には数隻の軍艦がいた。そして最も大きな戦艦が上がった。幅は一八フィート（「およそ八間」<sup>(67)</sup>）＝一四・四八m）、長さは二三三フィート（「およそ三八間」＝六八・七二m）、大砲は四つの甲板に設置されている。下の二つの甲板は水兵たちが占めている。軍艦には全部で五つの甲板がある。島には要塞が数カ所あり、島を取り囲む海には堡壘が五つあるが、それらは大砲を装備していて、その総数は五、〇〇〇に及ぶ。また兵器庫（武器庫）を訪れた。市川は、兵器庫には訳一五、〇〇〇丁の新型の銃、六〇、〇〇〇丁の火打式銃【市川は「石製」と表現】、大量の様々な刀剣類が保存されている、と記している。更に彼によって、港と島というのは自然が生み出した天然の要害施設で、世界中に見られるものであるが、ロシアにとっては最も重要な戦略的要塞であると記されている【市川は「此港は即是世上に有名勝形の天嶮當國に在りては實に咽喉の要地最如此嚴備無る可からざる所なり」と記している<sup>(68)</sup>】。午後日本使節団は写真館に行き、そこで写真に写った。市川が、クロンシュタットを訪れた日本人から聞いたことを記したのであろうことはまず間違いない。彼の日記には戦列艦【Имяхъ корабль】「戦列艦」【主力艦】の名称は明記されていない。しかしながら、ロシア臣民にとって「皇帝ニコライ一世」号の名は大きな意味を持っている。

福澤諭吉は、『西航記』の文久二年八月一七日付の部分に興味深い記

述を残している。「我々はクロンシュタットに向かった。クロンシュタットは、ネヴァ川の河口に位置し、サンクト・ペテルブルグから北西五里のところにある大きくない島である。「一里」は三九七二m、クリモフ<sup>69</sup>。ネヴァ川は水深が浅く、大型船はサンクト・ペテルブルグに直接接岸することが出来ない。軍艦も商船も、喫水が一〇尺「三m三九cm、クリモフ」以上の船はすべてクロンシュタットに停泊する。従って、この場所には、サンクト・ペテルブルグにとって重要な戦略拠点で、多くの堡塁が構築され、そこには数百門の大砲が配備されている。この島には税関「運上所」<sup>70</sup>、製鉄工場「おそらく、蒸気船工場のことであろう、クリモフ」がある」。福澤の言うところでは、工場の設備は他の国で見たと変わらぬ。蒸気船工場という名称は誤解を招きやすいものであった。なぜならば、工場は幾つかの大作業所を統合したものだだからである。

「蒸気船工場の建設計画を作成する際に、幾つかの異なった工場を合体し一括管理するかたちにする」という命令が出された。そうすることにより、工場管理が大幅に簡素化し、作業そのものもより効率的に行われるであろうというものであった。こうした原則の下に作られた『蒸気船工場』に含まれている主な工場は次のようなものである。(一) 鑄造工場 (二) 鑄工場 (三) 機械工場など<sup>71</sup>。

海軍工廠には、修理のための大型艦を何隻か収容できるドックがある。ドックへは渠門から艦船を引き入れ、渠門の扉を閉めて水を機械で汲み出し、船底を検査することが出来る。このドックはピョートル一世の指導の下に作られたとされている<sup>72</sup>。

ドックで日本人たちは、労働者が「八〇〇馬力のスクリュー式フリゲート艦セヴァストーポリ号の建造」に取り掛かっているのを見ることが出来た。

「材料は樫材、…卸価格が六十六万九千五百七十八ルーブルの銅の固定部と覆いの他は、請負業者からの納入材料である。機械部はペテルブルグの工場主ベルドに発注された。建造に当たっては、港湾局【Исполное Управление】から、原材料の良質性、個々の部分の仕上げの入念さ、接合部の堅牢さに対し、最大限の配慮と監視が向けられた<sup>73</sup>」。

福澤は、『西航手帳』の八月一七日付の中でクロンシュタット訪問に言及している。中でも彼は、兵器庫に一万二千丁の新型「ライフル小銃」の他に六万丁の小銃が所蔵されていること、日本の客が戦列艦「皇帝ニコライ号」を訪問したことを記している（「大きな戦艦皇帝ニコライ号」<sup>74</sup>）。福澤の表記は「大軍艦エンペルニコラーと云る／船を観るスクールフ」。さらに福澤は、この戦艦は六〇〇馬力の動力を備えていること、戦艦の規模が長さ二五三フィート、幅四九フィート、深さ六〇フィートであることを指摘している。「艦は一〇門の大砲を装備している。堡塁は石で構築されており、その壁の厚さは一〇フィートある。乾ドック「ツライドック」を創ったのはピョートル「二世」である<sup>74</sup>」。福澤の表記は「コロンスタットバッテリーは石なり厚さ十フィート／ツライドック伯徳帝所造」。なお、鈴木健夫の論文で記されている大砲の数は間違っている。すなわち、三門ではなく、一〇〇門以上、正確には一一門である<sup>75</sup>。

福澤の『西航手帳』には、通した記述形式の『西航記』には含まれていない補足的な情報が含まれている。訪問先の記述は極めて簡単である（『西航記』の著者が、同行した海軍庁の公的人間の説明であろうと思われるものをそのまま書き留めたことは間違いないとしても）。不思議なことに、福澤も市川も、旧型および新型の大砲の数、兵器庫に所蔵されている刀剣類の種類について詳細に記している一方で、他の訪問先については、単にその名を挙げるか、あるいはまったく何も伝えていない

かのどちらかである。例えば、海軍士官クラブ（しばしば「海員集会場」と呼ばれていた）、および図書館の訪問については一言もない。ちなみに、ペテルブルグにやって来たヴィクトリア女王の次男アルフレッド王子に随行した海軍軍人たちは、クロンシュタット訪問した際かなり長時間図書館に滞在し、「海軍クラブの：素晴らしい造りを目にした際の感嘆の気持ちをして」を表明し、「特に自分たちが気に入ったのは舞踏ホールと客室で：、このような施設は自分たちだけの港町にはまったくないと語った<sup>(76)</sup>。

日本の客が目にしたのは、工場、ドック、造船場、中心街のゴスポドスカヤ通りのあるクロンシュタットの表の顔である。すなわち、彼らはあらかじめ設定されたルートを案内され、それからわずかに外れたのみであった（戦列艦皇帝ニコライ一世号訪問）。しかし、外国人が目にしたなかった別のクロンシュタットもあった。それについて、「A.T.」のイニシアルのみで名を隠した、おそらく海軍士官であろうと思われる人物が『クロンシュタット通報』【Кронштадтский вестник】に次のように書いている。

町は「出来てから二世紀経っているにも関わらず、個人の住宅は、木造に比べて石造の方が多いと誇れるような状態にはない。町のすべての地区は、家というより、手作りのしかもほとんどが舢船材製で【в бродовом несе】組み立てられた、小屋と言った方がよいもので満ちあふれている。クロンシュタットの住人で、山、すなわち移住者地区を知らない者は、チェタルナヤ、シベルスカヤ、ガルキナヤその他の多くの通りをしばらくでも散歩し、おそろしく汚い中庭、階段の代わりに船のタラップを用いた、窓が斜めになっている前世紀以来の建物である家々が続いているのを眺めるだけで十分である。これら古い家は、五〇年あるいはそれ以上経っており、中にはナポレオンのロシア侵攻時を記

憶しているようなものまでもある。いったい何世代に亘って若い士官たちが、これらの家の小部屋や屋根裏部屋【в крещатках и вышках】で過ごし、傾いた窓から汚い中庭や鬮鶏を眺めて楽しんできたことか。：クロンシュタットにおける著しい部屋不足のため、多くの独身の士官たちは、それら屋根裏部屋に【к этим брешкам】行き場を求め、おそろしく高い家賃を支払わざるをえない。小さな台所付きの小部屋が六〜八ルーブル、床がひび割れし壁紙がはげ落ちた二部屋あるいは三部屋の住まいだと一五ルーブル以上で、家具と薪は別払いである。ロンドン、パリ、またペテルブルグでさえ、これほど高い部屋はないのではなからうか。身近な者の逼迫につけこむとはまさにこのことではなからうか。：

サンクト・ペテルブルグでは、家具と召使いの付いた上等な部屋（Chambre garnie「家具付きの部屋」）でせいぜい銀貨一五ルーブルなのであるから、クロンシュタットで家具付きの部屋をそれ以下で貸すというのがなぜ出来ないのか、独身の士官たちが机と椅子を持って何度も引越しに駆け回らざるをえないようなところが他にあるだろうか。

現在までのところクロンシュタットにはきちんとしたホテルはひとつもない。最上の通りにある最高のホテルであるナポリは部屋だけは立派だが、あとは自慢できるものはない。食事は、性質上、冷製以外は、口にするにすらできず、部屋は手入れされないままで、召使とも気を配らない。ホテル・サンクト・ペテルブルグとホテル・パリは、部屋の豪華さは劣るが、ナポリよりは手入れがよい。クロンシュタットの家主の方々には：あまり大きくない部屋のより良い供給、そして、特に家具の備え付けを改善して、然るべき収入を良心的に得ることに注意を向けて頂きたい。そのことで家主の方々が損失を蒙るようなことは勿論ないであらう<sup>(77)</sup>。

客観性のために述べておかなければならないのは、市当局が状況改善

に乗り出し、同じ年の一八六二年に、警察と役所の入っている建物の修繕が行われ、クロンシュタットに下水管を敷設する工事が始まったことである。この工事には三、〇四〇ルーブル二六・五コペイカが支出された。<sup>78)</sup>

海軍庁【Морское ведомство】も、海軍士官および住民の居住条件改善のために少なからぬ労をとった。海軍省【Министерство】はクロンシュタットに、二二一戸の石造の家、一三二戸の木造の家、一一基の橋を所有していた。クロンシュタット港湾長官はその報告の中で次のように記している。「官営の建物には、特に、妻帯者、そして家族のいる下士官のための部屋が不足しているため、個人所有の家を六戸借り受け、毎年一三、五〇〇ルーブルを支払っている…。海軍庁【Морское ведомство】の所有する建物の修理に二万八千六百八十六ルーブル二〇コペイカが支出された」。

更に、日本使節団が去った四年後、クロンシュタットの中心部のガス燈計画が実現に向けて動き出した。

日本使節団のサンクト・ペテルブルグ滞在は一ヶ月以上に及んだ。ロシアの首都の多くの名所を訪れた日本人たちの覚え書きを読むと、簡単に無味乾燥であり感情が欠如していることに驚かされる。そこではすべてが出来事の単なる記録に集約されている印象を受ける。よその国の習慣や文化に対する素朴な好奇心が見られないことも驚きである。このことは、運命の意志により琉球、下田、サハリンに行くこととなったロシア士官たちの手記や報告類と比べると、特に際だつ。我々が確認できた限りでは、『手帳』の中で福澤は一度だけ地名をロシア文字で書き留めている（「Урал」）。どうやらこれは、福澤たちが列車でヨーロッパに戻る際に、駅舎に掛けてあった表示の文字を単に写したもののようである。

一方、例えばポシエットはその手記の中でしばしば漢字を用いて書き、

日本語の語句や文を集めたものを作っている。それに対し福澤諭吉は『手帳』の中で一度だけ、ロシア語の挨拶をカタカナで書き留め、英語に翻訳したものを添えている。しかし、カタカナで記されたとおりに発音した場合、その語句を理解できるロシア人はまずいないであろう。

以下キリル文字で再現する。【以下ロシア文字部分は『西航手帳』の中のカタカナ表記を併記。ただし「キ」は促音【Какъуащилизупаговэ】【クワシズダゴウキエ】(how is your health?)は、おそろしく【Как Бане здровье?】【お元気ですか】の意】と理解すべきであろう。また、какрепализиш【カクウキバジウキイ】は、英語訳のないままであるが、【Как вы поживаете?】【いかがおすごしですか】の意】に最も近い。あるいは、Буагосапоапно【ブワゴサリユ】(thank you)は【Гуагоапно】であろう。また、Богиш харапи【ラーチンハラリー】(very well)は【очень хорошо】に最も近い<sup>80)</sup>。

福澤の『手帳』の中には、全体的に非常に簡潔な叙述にもかかわらず、英語による長いまとまりのある文章が見られ、ロシア（国家および民族についての全体的な複合概念としての）について、外国語、なによりも英語を通して理解され、情報が中継され、伝えられたと想定することができる。それは、クロンシュタットの工場やドックを訪れた際の覚え書きの中に、「他のヨーロッパ諸国と同様」という内容（部分的にはまさにその通りであるが）に尽きる短いコメントが見られることも関係する。しかしながら、これらの工場やドックには、日本使節団員がちょうどその時期に訪問したロンドン博覧会でメダルを授与された考案装置があったのである。使節団員が訪問先の施設について詳細な報告書を上役宛てに書いた可能性は排除できないが、本稿の著者は未見である。

●使用文書館史料

1. Отдел архивных документов Российской национальной библиотеки (сокращенно: ОАД РНБ). Фонд 1. Опись 1. Дело 38. Дело управления Императорской Публичной библиотеки Бумар, не требующих производства и к сведению принимаемых. 1864 год. На 42 листах.
2. Отдел рукописей Российской национальной библиотеки (Сокращенно ОР РНБ). Фонд 380 (Архив М.А. Корфа). Опись 1. Дело 42. Письма-отчеты Модесту Петровичу Корфу об отношении посетителя к демонстрируемым сокровищам Публичной библиотеки. 28 июня 1859 г. - 21 апреля 1860 г. Автограф. Листов 151.
3. Отдел рукописей Российской национальной библиотеки (Сокращенно ОР РНБ). Фонд 380 (Архив М.А. Корфа). Опись 1. Дело 43. Коссович, Каеган Андреевич, библиотекарь Публичной библиотеки. Письма-отчеты Модесту Петровичу Корфу об отношении посетителя к демонстрируемым сокровищам Публичной библиотеки. 25 апрел 1860 - 4 мая 1861 г. Автограф. пометы красным карандашом В.В. Стасова. Листов 77.
4. Российский государственный архив военно-морского флота (сокращенно: РГА ВМФ). РГА ВМФ. Фонд 410. Опись 2. Дело 1832. Канцелярия Морского Министерства. Отделение 1. Дело О предоставлении Главными Командирами портов в Департамент и другие учреждения Морского ведомства годовых отчетов. Начато 28 Октября 1860 года. Кончено 29 Января 1861 года. На 78 листах.
5. РГАВМФ. Фонд 410. Опись 2. Дело 55. Кронштадтского Пароходного Завода по канцелярии. Дело 1863 г. О представлении к Г. Управляющему Морским Министерством описания Пароходного

завода и ведомостей. Начато 12 Марта 1863 г. Кончено 23 Июня 1864 г. На 67 листах.

9. Российский государственный исторический архив (ниже РГИА). Фонд 473. Опись 3. Дело 326.

●出典

7. Отчет Императорской Публичной библиотеки за 1862 год, представленный г. министру Императорского Двора директором Библиотеки, тайным советником Деляновым. С.-Петербург: Типография II Отделения Собственной Е.И.В. Канцелярии, 1863. 96 с.
8. Отчет Императорской Публичной библиотеки за 1863 год, представленный г. Министру народного просвещения Директором Библиотеки, тайным советником Деляновым. С.-Петербург: Типография II Отделения Собственной Е.И.В. Канцелярии, 1864. 186 с.
9. Кронштадтский вестник. Морской и политический листок. 1862 г.
10. Санктпетербургские ведомости, Газета политическая и литературная. 1862 г.
11. 市川清流『尾蠅欧行漫録』(【大塚武松編】『遣外使節日記纂輯』第二卷所収、【日本史籍協会、】一九二九年、二四九―五六二頁)。
12. 野沢伊久太「郁大」『遣欧使節航海日録』(【大塚武松編】『遣外使節日記纂輯』第二卷所収、【日本史籍協会、】一九二九年、一一三―一四八頁)。
13. 福沢諭吉『西航記』(『福沢諭吉全集』第一九卷所収、岩波書店、一九七一年、六一―六五頁)。
14. 福澤諭吉『西航手帳』(『福沢諭吉全集』第一九卷所収、岩波書店、

一九七一年、六六一—四五頁)。

●文献

15. Бочаров А.А. Обучение грамоте матросов русского флота во второй половине XIX века//Елагинские чтения. Выпуск V. СПб.: Остров, 2011. С. 122-129.
16. Климов В.Ю. Александр Федорович Можайский и Василий Васильевич Можайские и Япония//Елагинские чтения. Выпуск V. СПб.: Остров, 2011. С. 109-121.
17. Новикова Л.И. К.Н. Мапошкин-основатель первой матросской библиотеки//Елагинские чтения. Выпуск VII. СПб.: Гиперион, 2014. С. 166-175.
18. Отчет Императорской Публичной Библиотеки за 1856 год. Рецен. Н. П-скаго//Отечественные записки, учено-литературный журнал, издаваемый Андреем Краевским. ТОМ СХIII. 113. САНКТ-ПЕТЕРБУРГ. В типографии Н.И. Глазунова, 1857. Год девятнадцатый. ИЮЛЬ/П. Критика и Библиография. С. 16-25.
19. Русский биографический словарь Том I. Ааронъ-Императора Александр II. Издан под наблюдением председателя Императорского Русского Исторического Общества А.А. Половцова. С.-Петербург: Типография И.Н. Скороходова, 1896. 892 с.
20. 宮永孝『幕末遣欧使節団』講談社学術文庫、二〇〇六年、全三七八頁。
21. 鈴木健夫「ペテルブルクにおける使節団と真面目な守旧派と陽気な進歩」(鈴木健夫P・スノードンG・ツォーベル『ヨーロッパ人の見た文久使節団 イギリス・ドイツ・ロシア』所収、早稲田大学

出版部、二〇〇五年、一六一—一八五頁)。

22. 保田孝一「ペテルブルクの福沢諭吉」(『福沢諭吉年鑑』第十七巻、一九九〇年、六一—六四頁)。

23. Fukuzawa Yukiichi on Education. Selected Works. Translated and edited by Eichi Kyooka. Introduction by Kazuyoshi Nakayama. Tokyo: University of Tokyo Press, 1985.

(有泉和子訳)

〔注〕

- (1) ロシア帝室・皇帝領省【Министерство Императорского Двора и уделов】は一八二六年八月二三日(西曆九月三日)に設立された。皇帝に直属する大臣を長とする。この職務に任せられるのは、特別の信頼を与えられたロシア帝国の最高官たちである。アドレルベルグ伯爵は、P・M・ヴォルコンスキー公爵の死後、一八五二年八月三〇日、ロシア帝室宮内大臣に任命され、二〇年間もの間、その失明まで続けた。(Русский биографический словарь Том I. С.-Петербург: Типография И.Н. Скороходова, 1896. С. 75)

なお、帝室宮内大臣は侍従武官長のV・F・アドレルベルグ伯爵は、「[帝国公共] 図書館が彼の指揮下にあった期間、皇帝陛下に対するその教養ある忠節でもって、図書館の草稿および印刷本の宝庫を豊かにし、財政面の強化に尽くした」ことへの感謝の印として、図書館の「名誉職」の称号が授けられた」。(Отчет Императорской Публичной библиотеки за 1863 год. С.-Петербург, 1864. С. 5-6.) 【引用文中「」はクリモフ補注。以下同様】  
現在のロシアではその官庁は、条件付ではあるが、言ってみれば、ロシア連邦大統領指揮下の官庁【Управление делами Президента Российской Федерации. Президентта Российской Федерации】のよびなみのである。

- (2) РГИА. Фонд. 473. Опись. 3. Дело. 326. Л. 42.
- (3) Там же. Л. 42.
- (4) РГИА. Фонд. 473. Опись. 3. Дело. 326. Л. 149-149 об.

- (5) Там же. Дл. 155-155 об.
- (6) Там же. Л. 152.
- (7) Отчет Императорской Публичной Библиотеки за 1856 год. Речен. Н. П-скаго//Отечественные записки, учено-литературный журнал, издаваемый Андреем Краевским. ТОМ СХІІІ. 113. САНКТПЕТЕРБУРГ. В типографии Н.И. Глазунова, 1857. Год девятнадцатый. ИЮЛЬ/П. Критика и Библиография. С. 16.
- (8) Там же. С. 17.
- (9) Там же. С. 17.
- (10) Там же. С. 22.
- (11) Там же. С. 25.
- (12) Санктпетербургские ведомости. No. 222. 12 октября 1862 г.
- (13) Отчет Императорской Публичной Библиотеки за 1863 г. С.-Петербург, 1864. С. 3.
- (14) Там же. С. 3-4.
- (15) Там же. С. 8-9.
- (16) Там же. С. 23.
- (17) Там же. С. 24.
- (18) Отчет Императорской Публичной Библиотеки за 1863 год, представленный г. Министру народного просвещения Директором Библиотеки, тайным советником Деяновым. С.-Петербург. 1864. С. 116.
- (19) Там же. С. 73.
- (20) Санктпетербургские ведомости, 24 июля 1862 г., No. 160. С. 697.
- (21) 宮永孝『幕末遣欧使節団』【講談社学術文庫】、二〇〇六年、二七五頁。
- (22) РГИА. Фонд. 473. Опись. 3. Дело. 326. Л. 168.
- (23) Там же. Л. 169.
- (24) ソボリシシコフ、ヴァシーリー・イヴァノヴィチは一八一三年にヴィテプスク【白ロシアの州名であり都市名】に生まれる。一八三四年から帝国図書館に勤務、図書館員、建築家、一八七二年一月一日サンクト・ペテルブルグで死去。海外書籍部門の創設、ロシアの啓蒙に多大な尽力をした (Rossica, Россия)。
- (25) ОАД РНБ. Фонд 1. Опись 1. Дело 38. Л. 28.
- (26) РГИА. Фонд. 473. Опись. 3. Дело. 326. Л. 170.
- (27) Отчет Императорской Публичной Библиотеки за 1863 год. Санкт-Петербург. 1864. С. 125.
- (28) Лонヴィチ、カエタン・アンドレウイチ (一八一四年三月二日—一八八三年一月二六日) ポロツク【白ロシア・ヴィテプスク州の都市】の出身。Санクト・ペテルブルグで死去。東洋学 (Санскритология、ペルシヤ学、セム学、アラビア語を研究)、パリ・アジア協会、ロンドン・アジア協会、ドイツ・東洋学協会会員。一八五〇年から一八八三年帝国公共図書館研究員、一八五三年東洋語書籍部門責任者。一八五八年からСанクト・ペテルブルグ大学で教える。
- (29) ОР РНБ. Фонд 380 (Архив М.А. Корфа). Опись 1. Дело 42. Лл. 1-151; ОР РНБ. Фонд 380 (Архив М.А. Корфа). Опись 1. Дело 43. Лл. 1-77.
- (30) Fukuzawa Yukichi on Education. Selected Works. Translated and edited by Eiichi Kiyooka. Introduction by Kazuyoshi Nakayama. Tokyo: University of Tokyo Press, 1985. P. 6.
- (31) 前掲書。
- (32) 福澤諭吉は漢字を使つて「蔵書庫」と書してゐる。最初の二字の「蔵書」はロシア語では「библиотека【図書館、書庫】」を意味するが、『大和露辞典』【*Большой японно-русском словаре*】には「個人」と注がある。三番目の「庫」は倉庫を意味する。ゆえにロシア語では「книгохранение【大公共図書館、書庫】」。日本人が訪問した時、開館前で、開館準備をしており、入館者はいなかった。それゆえ、福澤諭吉は【書庫だと思ひ】「蔵書庫」という言葉を使ったのだろう【福澤はクリモフ使用『西航手帳』八五頁では「書庫】】。
- (33) 福澤が漢字で「板本」と使っていることを指摘できるのは興味深い。板本とは基本的には木版本、つまり木板で印刷された本を意味するのだが。
- (34) 福澤はドイツを漢字二字で「独逸」と表記。
- (35) ヨーロッパは漢字で歐羅巴と表記。

- (36) 明らかに、宗教書のことであろう。福澤は「経書」という字を使っている。本来は中国の古典である。ここではおそらく、キリスト教の稀観本のことを言っているものと思われる。というのは、帝国公共図書館の蔵書にはその種の出版物が少なからず蒐集されているからである。ただし、確認は要する。
- (37) 福沢論吉『西航記』四九頁。
- (38) おそらく、一五六四年三月一日モスクワで、イワン・フォードロフ(一五一〇—一五八三)とピョートル・ムスチスラヴェツ(?)—一五七八(?)により出版されたロシア最初の刊本『使途行伝』、正式名称『使途行伝、公同書簡、聖パウロ書簡』のことであろう。
- (39) ヨハネス・グーテンベルク(ドイツ語ではJohannes Gutenberg, 生没は一三九七—一四四〇—一四六八)のことであろう。特にマテウス・パルメリウスは一四八三年に「一四四〇年、書籍印刷術がマインツ市のグーテンベルクによって考案された」と記している。福沢論吉の『西航手帳』の中に断片的な情報を書き留められている。おそらく、帝国公共図書館の見学では賓客に対して、ヨーロッパおよびロシアにおいて最初の印刷本が作られた歴史についての話が為されたようである。
- (40) ヨーロッパで最初の印刷書は、一四五五年、ヨハネス・グーテンベルクが出版したドイツの聖書と考えられている。
- (41) 福澤論吉『西航記』八五頁。
- (42) Отчет Императорской Публичной библиотеки за 1862 год. С.-Петербург, 1863. С. 8.
- (43) Отчет Императорской Публичной библиотеки за 1862 год. С.-Петербург, 1863. С. 12.
- (44) Ботаров А.А. Обучение грамоте матросов русского флота во второй половине XIX века//Елагинские чтения. Выпуск V. СПб.: Остров, 2011. С. 124-125.
- (45) Кронштадтский вестник. No. 90, 10 октября 1862 г. С. 376.
- (46) Новикова Л.И. К.Н. Матюшкин-основатель первой матросской библиотеки//Елагинские чтения. Выпуск VII. СПб.: Гиперион, 2014. С. 173.
- (47) Кронштадтский вестник, No. 52, 5 июля 1862 г. С. 221-222.
- (48) アルフレッド王子は、ヴィクトリア女王の【第四子で】次男、アレクサンドル二世の唯一の娘である大公女マリア・アレクサンドロヴナ(一八五三—一九二〇)と結婚。
- (49) Санктпетербургские ведомости, 8 августа 1862 г., No. 171.
- (50) Там же.
- (51) Санктпетербургские ведомости, 17 августа, No. 178. С. 768.
- (52) Санктпетербургские ведомости, 5 октября 1862 г., No. 216. С. 923.
- (53) Санкт-Петербургские ведомости, 1 августа, No. 166. С. 720.
- (54) 保田孝一「ペテルブルクの福沢論吉」『福沢論吉年鑑』第十七巻、一九九〇(六一—六四頁)。
- (55) 鈴木健夫「ペテルブルクにおける使節団—真面目な守旧派と陽気な進歩」(鈴木健夫, P. スノードン, G. ツォーベル『ヨーロッパ人の見た文久使節団 イギリス・ドイツ・ロシア』早稲田大学出版部所収、二〇〇五(一七六—一七七頁))。
- (56) Там же. Д. 173.6.
- (57) 第一使節の肩書【Генерал】をロシア人は間違えている。シモダ・ノ・カミではなく、シモツケ・ノ・カミ。シモツケは県名、シモダは伊豆半島にある町である。下田は、伯爵プチャーチン・エウフィミー(エフィム)・ヴァシリエヴィチ(一八〇三—一八八三)の外交使節団がそこを訪れて以来ロシア人にはよく知られている町である。
- (58) 名前は、新聞に印刷されている通りに引用した。現在ロシアのすべての日本関係専門家に採用されているポリヴァノフの日本語転写方式に従えば、それぞれ「Такути Симоцукэ-но ками (竹内下野守)」、「Фукути Гэньитиро(福地源一郎)」となるべきである。
- (59) Санкт-Петербургские ведомости, 4 сентября 1862 г., No. 192. С. 824/2.
- (60) 宮永孝「文久遣欧使節団」『講談社学術文庫』二〇〇六年、二七七頁。
- (61) 福澤論吉『西航記』一〇八頁。
- (62) Климов В.Ю. Александр Федорович Можайский и Василий Васильевич Можайские и Япония//Елагинские чтения. Выпуск V. СПб.: Остров, 2011. С.

- 109-121. 【クリモフ「アレクサンドル・フョードロヴィチ・モジヤイスキーとヴァシーリー・ヴァシリエヴィチ・モジヤイスキーと日本」】
- (63) Санкт-Петербургские ведомости, 4 сентября 1862 г., No. 192. С. 824/2.
- (64) Кронштадтский вестник, 19 сентября, No. 81. С. 337.
- (65) サージェンは、古くロシアの計測単位である。一六四九年の『會議法典【Соборное уложение】』では、公定サージェンは二・一六mに等しかった。ポートル一世（一六七三—一七二五）、在位一六八二—一七二五）治世時に量目が変更され、イギリスの計測単位に近づけられた。ニコライ一世（一七九六—一八五五）、在位一八二五—一八五五）時に一八三五年一月一日の勅令「ロシアの度量衡制度について【О системе российских мер и весов】」により、サージェンは二・一三三六mに、立方サージェンは九七・三三<sup>10</sup>田<sup>10</sup>された。
- (66) РГА ВМФ. Фонд 410. Опись 2. Дело 1832. Лл. 65-65 об.
- (67) 間は長さの単位、一間は一・八一m。
- (68) 市川清流『尾蠅欧行漫録』（『遣外使節日記纂輯』第二卷、一九二九年、四八一頁）。
- (69) 他の地名とは異なりサントク・ペテルブルグのことを福澤は漢字で「伯徳祿極」と記している。
- (70) 福澤諭吉『西航記』五〇頁。
- (71) РГА ВМФ. Фонд 781. Опись 2. Дело 55. Кронштадтского Пароходного Завода по канцелярии Дело 1863 г. О представлении к Г. Управляющему Морским Министерством описания Пароходного завода и ведомостей. Лл. 57.
- (72) Там же.
- (73) РГА ВМФ. Фонд 410. Опись 2. Дело 1832. Канцелярия Морского Министерства. Отделение 1. Дело О предоставлении Главными Командирами портов в Департамент и другие учреждения Морского ведомства годовых отчетов. Начало 28 Октября 1860 года. Кончено 29 Января 1861 года. Лл. 62-62 об.
- (74) 福澤諭吉『西航記』八六頁。
- (75) 鈴木健夫上掲書一六四頁。
- (76) Кронштадтский вестник, No. 61, 5 августа 1862 г. С. 257.
- (77) Кронштадтский вестник, No. 60, 1 августа 1862 г. С. 256.
- (78) Кронштадтский вестник, No. 60, 1 августа 1862 г. С. 256.
- (79) РГА ВМФ. Фонд 410. Опись 2. Дело 1832. Канцелярия Морского Министерства. Отделение 1. Дело О предоставлении Главными Командирами портов в Департамент и другие учреждения Морского ведомства годовых отчетов. Начало 28 Октября 1860 года. Кончено 29 Января 1861 года. Лл. 69 об. - 69 об.
- (80) 福澤諭吉『西航手帳』七五頁。
- (81) 福澤上掲書七五—七六頁。
- (i) 【】は翻訳者の注。以下同様。
- (ii) 「」は略記に対するクリモフ注。